

今度はホッキ漁復活！
—地先資源の有効利用への取り組み—

相馬双葉漁業協同組合新地支所青壮年部
寺 島 一 雅

1. 地域及び漁業の概要

相馬双葉漁業協同組合新地支所は、福島県の最北部、宮城県との県境に位置する新地町にあり、組合員数71名、47隻の漁船が所属している。カレイ類を主な対象とした固定式さし網漁を中心に漁業が発展してきた地区であり、ほかにコウナゴやメロウド、サヨリなどを対象とした船びき網漁、タコかご漁などが盛んである。平成21年の年間水揚げ金額は5億1千万円、うち属地水揚げ金額は3億8千万円で、近年は魚価の低迷などにより減少傾向にある。

2. 研究グループの組織と運営

新地支所青壮年部は、部長、副部長を含めて20名で構成され、これまでに、ホタテガイの養殖試験やクルマエビの源式網操業試験、アワビ漁場造成試験、マイワシ流し網操業試験などに取り組んできた。特に、アワビ漁場造成に併せて取り組んだ磯根漁業は、その後新規漁業として定着している。また、マイワシ流し網漁は近隣支所にまで波及し、漁家経営の向上に大きく寄与した。この他、魚食普及や地域活動の一環として、新地町主催のイベントに例年参加し、海産物の販売や漁船パレードなどを実施している。

3. 実践活動取組課題選定の動機

新地支所では、固定式さし網漁、船びき網漁の他に、貝けた網によるホッキ漁が昭和55年から行われてきたが、昭和60年の191トン、1億円をピークに水揚げ量は減少した。平成12年には水揚げ量は2トンまで減少し、魚価安もありその翌年には操業者はいなくなった。このような中、相馬海域で平成15年、17年には、平成6年以来となるまとまった稚貝の発生があり、近隣支所ではホッキガイの漁獲量が増加した。未利用だった当支所の前面海域でもホッキガイ資源が回復している可能性があり、試験操業の検討を始めた。

4. 実践活動状況及び成果

(1) 試験操業

ホッキ漁に用いる貝けた網は、新地支所でも他の相双地区同様、合わせマンガが用いられてきた。しかし、試験操業では、資源状況や効率的な漁獲方法を検討するため、水産試験場から借用した噴流式マンガを用いた。噴流式マンガの操作方法やコツなどは水産試験場から教えてもらっていたが、合わせマンガのホッキ漁ですら見たことがなかった我々は、技術的に非常に不安だった。しかし、かつて合わせマンガで操業していた浜の先輩2名に

も乗船してもらい試験操業に乗り出した。

平成19年7月に漁港すぐ近くで試運転を兼ねて1番曳を行い、ホッキガイ約65kgを漁獲した。漁港のすぐ近くで殻長9cm以上の大型のホッキガイが獲れたのには部員一同驚いた。入港すると、組合員が集まり同じように驚き、過去の漁場や漁具の話などで盛り上がり、部員の意欲も一層高まった。平成19年は試運転の7月も含め11月まで計5回調査した。調査地点は、底質や過去の漁場の情報を参考に計7地点（図2、A、B、E、F、H、I、J）とした。その結果、漁獲サイズのホッキガイを多数確認するとともに、分布量は、漁港の南側（図2、I、J）よりも漁港間口から北側（図2、B、E、F）に多いことが確認できた。この年は、噴流式マンガのポンプ回転数や網の出し方など試行錯誤を繰り返し苦労したため、調査結果は部員一同満足のいくものであった。

平成20年には、我々の試験操業が漁業後継者グループ活動支援事業に認定され、県の補助を受け7月から11月まで計6回調査した。前年に泥場のためうまく曳網できなかった漁港南側の地点と分布が多かった漁港間口から北側の地点を再調査した。泥場である漁港南側（図2、H、I、J）では曳網はうまくいったが分布量は少ないことがわかった。また、漁港間口から北側では、調査定点が近くても殻長7.5cm前後の小型貝ばかりで操業に適さない地点（図2、C、D）や、殻長8.5cm以上の大型貝が非常に多い好漁場の地点（図2、E、F）があった。

2年間の調査結果から、ホッキガイの資源量は操業可能な状態まで回復したことを確認した。また、ホッキガイは狭い範囲でも分布量やサイズが大きく異なること、漁場周辺は泥場から岩盤まで変化に富み、底質が操業条件として重要であることを学んだ。また、試験操業前には、マンガを曳けばどこでも簡単にホッキガイを漁獲できると思っていたが、今回の試験操業から、ホッキ漁に対する認識が大きく変わった。操業面においては、マンガは大きく重い漁具であり、狭い船上での投揚網作業は非常に危険であることが分かったことは、今後の操業に大変役に立った。

(2) 試験販売

平成19年7月に漁獲したホッキガイは、8月の新地町の一大イベント「遊海しんち」で「釣師産ホッキガイ」（10個で1,000円）として試験販売を行った。見事完売し、イベントでの産直活動への自信に繋がった。また、9月に漁獲したホッキガイ720kgのうち商品サイズのもの、着業の検討材料とするため測定後に市場へ出荷した。殻長8～10cmまで0.5cmごとに4つの規格に選別する作業は非常に手間がかかったが、各々キロ当たり459円、389円、330円、259円の高値が付き17万円を売り上げた。仲買業者のご祝儀で高値が付いたが、今後水揚げした際の買い受け先がある事が分かった。

平成20年は7月に「遊海しんち」、11月に「新地町ふるさと産業まつり」で「釣師産ホッキガイ」（13個で1,000円）として再度販売した。あるお客さんからは「新地にホッキいねえべ？」と他県産を疑われたが、新地のホッキガイが増えた事を説明しながら地元産であることをPRした。地元のホッキガイを求めるお客が意外と多いことを知り、今後の産直活動の良い検討材料となり、活動への意欲も高まった。

(3) 試験操業から本操業へ

これまでの2年間の調査結果によって、操業可能な資源量が確認されたため、着業希望者が出た。支所では直ちに理事会を開催し、操業ルール（番数制限）を新たに決定した。

着業隻数は11月に1隻、12月には6隻にもなった。青壮年部の2年にわたる試験操業の結果が認められ、新地支所でのホッキ漁が復活した。

5. 波及効果

平成20年12月は、延べ72隻が操業し、12トン、380万円の水揚げがあった。1カ月に10トン以上の水揚げは、昭和61年11月以来と22年ぶりであった。1隻当たりの水揚げも1日当たり160kg、5.3万円とこれまでにない実績であった。しかし、番数制限以外取り決めがないため、このままではせっかく復活したホッキガイ資源を獲り尽くしてしまうことが懸念された。そこで、支所では再度理事会を開催し、番数制限から漁獲量制限に変更した。また、小サイズ（殻長8.0～8.5cm）中心の水揚げだったため、仲買業者からの要望が高い中サイズ（殻長8.5～9.0cm）を水揚げし、それより大きいものや小さいものは単価も安いので漁場に放流するようにした。このように、資源が無くなった過去の経験を生かし、資源を持続的に有効利用するための支所独自の取り決めを行った。また、平成21年12月からは他浜でも実績のあるプール制を導入した。水揚げ金額の分配だけでなく、操業者が比較的高齢なため、市場での計量や選別作業などを共同で行うためである。平成22年漁期は所属船47隻中6隻がホッキ漁に従事し、地域漁業として完全に定着した。

さらに、釣師産ホッキガイは、「身がしっかり入っていて美味しい」と好評で、青壮年部の産直商品の目玉として活躍し始めた。平成22年には「遊海しんち」、「新地町ふるさと産業まつり」で活ホッキガイの他、焼き物としても販売・PRし、売れ筋商品となっている。青壮年部として、これからも「釣師産ホッキガイ」を各種イベントなどの機会を捉え、新地町の特産品としてPRしていくつもりである。

これまで我々青壮年部は、平成16年にマイワシ流し網試験、平成9年から数年間アワビ漁場造成試験などに取り組み、新規漁業として定着させてきた。今後も、漁業を取り巻く情勢は厳しいと思うが、いろいろな漁法、資源の利用を研究し、様々な漁業の定着を図っていききたい。操業の対象魚種や漁法の選択肢が広がっていくことは、漁業が元気になり、浜に活気が出るとともに、漁家経営の向上につながっていくことだろう。

6. 今後の課題や計画と問題点

ホッキ漁を取り巻く状況は厳しく、単価の低迷や燃油高騰が続いている。現在、操業者は合わせマンガを使用しているが、昨年一人乗りで操業中に死亡事故が発生した。今後、漁家経営の安定や操業の安全を図るためにも、噴流式マンガの導入を検討する必要がある。

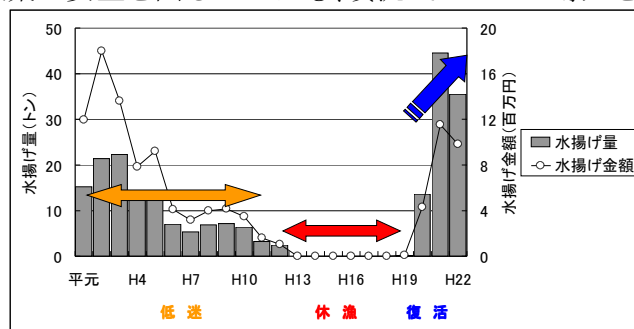


図1 新地支所におけるホッキガイの水揚げ状況

表1 新地支所ホッキガイ資源調査結果 (H20年のみ)

調査月日	調査場所	30分当たり平均漁獲量	平均殻長	備考
第1回次 H20,7/30、31、8/1の3日間	A 埵浜前	未測	未測定	うまく曳網出来ず
	B 釣師前-1	50kg	79mm	小型貝多い
	C 釣師前-2	100kg	76mm	小型貝多い
	D 釣師前-3	90kg(50~160kg)	77mm	小型貝多い
第2回次 H20,11/5、6、7の3日間	E 漁港間口北	60kg	87mm	大型貝主体
	F 漁港間口	140kg(90~200kg)	89mm	大型貝主体
	G 漁港間口南	未測	未測定	泥が深くうまく曳網出来ない
	H 又屋前	12kg	未測定	石などが入網し密度が低い
	I 中磯	10kg	未測定	泥場で密度が低い
	J タカオレ北	2kg	未測定	泥場で密度が低い

* H19年は、A、B、E、F、H、I、Jで実施した。



図2 調査地点

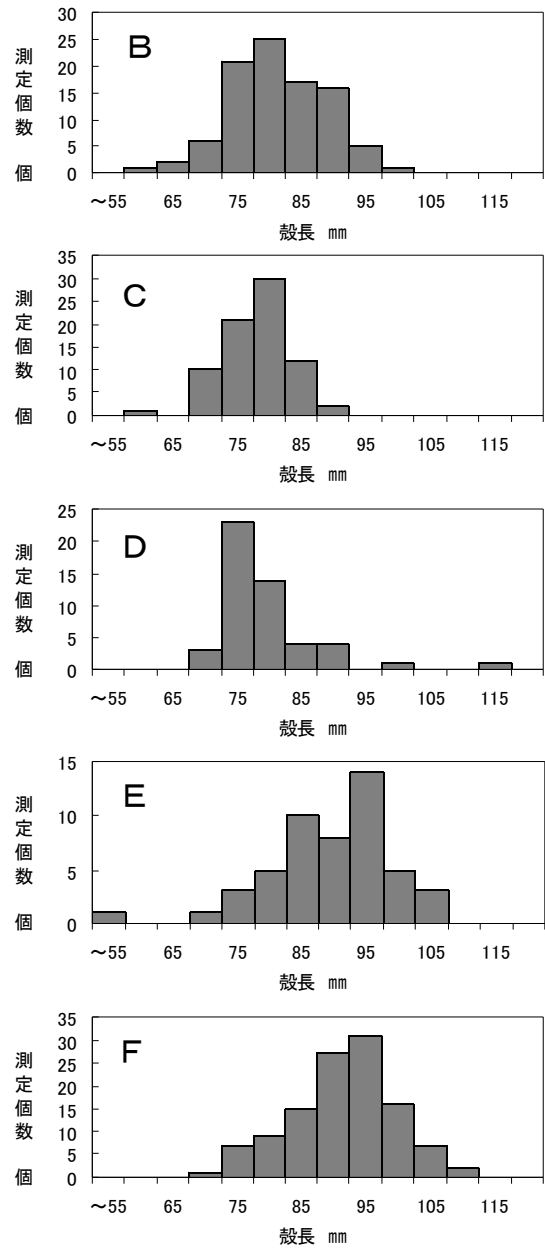


図3 調査地点別の殻長組成



図4 ホッキガイ資源調査風景



図5 ホッキガイの産直風景
(左：遊海しんち 右：新地町ふるさと産業まつり)